

## 女性としての生き方と娘の選択に 違和感を抱く暁子さんのケース

家庭問題情報センター 荒又和子

暁子さんは、娘さんの職業に関する選択について釈然としない様子で相談室を訪れました。「定年退職してから、自分の生き方がこれで良かったのか悩んでも遅いですよね。でも、第二の人生をどんな姿勢で過ごせば良いのか分からなくなりました」話は、そこから始まりました。

暁子さんは、専門的な仕事を続けながら、家庭のことも、一人っ子である娘さんを育てることに力を注いできました。若いころは、仕事を続けることに精一杯で定年まで働こうとかキャリアウーマンを目指すなどと考えてもいなかったのですが、いくつかの困難を乗り越えていくうちに、女性として時代に先駆ける生き方をしているという自負心も出てきて、辛いことがあっても、自分を励ましながら乗り越えてきたと言います。

娘さんが成長するにつれ、同志という思いさえ持つに至り、娘さんには、一世代前の先輩が築いた土台をスタート地点にして、さらに発展的に、自立した社会人として活躍してもらいたいという気持ちで接してきました。娘さんもそれを望んでいると疑いませんでした。

そして、娘さんもそれに応えるかのような進路を選び、キャリアと言われる仕事に就いていました。

ところがある日、娘さんは、夫の転勤を機に、仕事を辞めて一緒に行こうかなと言いつ

したのです。夫の転勤先が余りにも遠いために、どこかで予想していなかった訳ではなかったのですが、やはり違和感も感じたと言います。

それに加えて、暁子さんに話す前に、夫と相談するのは当然としても、他に何人かと既に相談しており、暁子さんが相談すべき人の後のほうだったことにも衝撃を受けていました。

**カ**（カウンセラー） いの一番の相談相手は

暁子さんだと信じておられたのですね。

**暁**（暁子） 夫と先に話し合うのは当然と思っ

ていましたよ。でも誰々に相談したら反対され、当分は別居して頑張ったと言われたなどと何人かの名前が出てきて、私ではなかったんだと思い、私と娘のつながりは何だったんだと心のどこかで感じました。

**カ** 娘さんはお母さんの期待を感じていて、決心が固まるまで言いにくかったのではないですか。

**暁** 私は娘の進路について、口を出したことはなかったと思います。何を学びたい等といわれる度に、それを叶える形で協力はしましたが、何になつたらとか、どんなふうに生きてほしいかななどの期待は口にしないうように注意していたつもりです。圧力をかけてはいけないと思ってきました。

**力** でも頑張っているお母さんを見ているのですから、期待されていると感じておられたのではないですか。

**暁** そうでしょうか。

一世代後は、さらに発展できる時代になるとは思っていたので、娘にも無意識の圧力があつたかもしれませぬね。

**力** 余りご自分を責めることはないと思いますよ。子どもに期待するのは親としては当たり前だし、それが子どもを励ますことにもなるのですから。

**暁** 娘から話を聞いたとき、自分でも驚いたのですが、複雑な気持ちを表すことなく、「それも選択肢の一つかもね」といかにも理解のある母親という受け答えをしていたのです。

うそではないのですが、複雑な多くを胸に秘めて、一番良い子の部分で答えている自分にも嫌気がさしています。

暁子さんは、これまでの自分と娘さんとの関わり方や、どうしてもらいたいと思っていたのか、自分の生き方にも迷いを感じるようになり、不安定な気持ちを持つようになったのです。

暁子さんは、数か月後に、再び相談にやってきました。

**力** 少し元気が出てきたようですね。

**暁** そうですね。社会は一直線に進むと信じていて、それで娘が仕事を辞めることを発展的に受け止めることができないでいたのだと思うのです。

**力** いろいろ言いたいことがあるのに、良い子の部分で答えたと言っておられましたけれど、言いたかったことはそのことですか。

**暁** そうですね。いろいろ考えてみましたけれども、何が言いたかったのか具体的にはないのですよ。娘にはただ近くにいるほしかっただけかもしれないとも思いました。

娘も決心を伝えてから、安心したのが、今後の生活の考えを話すようになり、夫の転勤先の地の利を生かしてできることに関心を持つていることも話してくれるようになりました。私などより、生き方に柔軟性があると感じるようになりました。

それで、私も、発展は細い線ではなく、幅広く柔軟であることのほうが大事ではないかと思うようになりました。これも多少無理をしながら言っている部分もありますけれども。

ただ私は仕事をしてきて、自分のことを自立した人間であると思っていたのが、違っていたのではないかと思うようになっていきます。娘に押し付けていないと

思っていたけれども、実は夢の続きを娘に託して、依存していたのではないかと感じています。

本当に自立した存在にまだなり切れていなかったことを痛感しました。

暁子さんは少し寂しそうに笑いながら、「歳はとつても、まだまだ自分に課題があることが分かりました。私も柔軟にやっついていけるよう頑張ることにしました」と述べて、相談室をあとにしました。

時間をかけて少しずつ乗り越えていく様子に、カウンセラーは安堵しました。

